

<全体分析>

試験時間 2科目150分

解答形式

記述, 論述, 選択

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)難易 (易化・やや易化・**変化なし**・やや難化・難化)

大問数は例年通り3題であり、全体の論述量は昨年とあまり変わらず、問題文の分量や設問数も昨年並みに多かったことから、全体としての分量は昨年並みであった。また、昨年同様、難度の高い考察問題が多く出題されており、難易度も昨年並みであったと考えられる。

出題の特徴と昨年との変更点

出題の多くは考察問題であるが、生物学用語の穴埋めや文章選択型の知識問題も出題される。例年、指定行数が1～3行程度の論述問題が多い。

その他トピックス

特になし

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
第1問	記述 論述 選択	遺伝子 発生	生物 基礎 ・ 生物	C プロモーターに呼び込まれた RNA ポリメラーゼ II は, Ser5 のリン酸化によりプロモーター近傍まで進んで一時停止し, その後, Ser2 のリン酸化により遺伝子内部へと進行すると考えられる。	やや難
第2問	記述 論述 選択	植物の反応 生殖 遺伝	生物	N 減数分裂時の乗換えは, 相同染色体を構成する DNA の塩基配列間で相同性が高い領域のみで起こるため, 選択肢(3)のように2つの遺伝子座の間で配列が大きく異なると, その間で乗換えが起こりにくくなる。	やや難
第3問	記述 論述 選択	発生 遺伝子 タンパク質	生物 基礎 ・ 生物	G タンパク質 D の濃度が 2.0nM で遺伝子 E に対する RNA 干渉を行ったときに, 遺伝子 A の発現が増加していることから, タンパク質 E 以外に遺伝子 A の発現を促進するはたらきをもつタンパク質 D の受容体が存在すると考えられる。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・教科書レベルの基本的な知識を身につけ、その内容を正確に論述できるように練習を重ねよう。
- ・普段の学習から、丸暗記ではなく論理的に考える癖をつけよう。
- ・過去問などの演習を通して、東大型の問題に慣れておこう。
- ・生物学の最新のトピックスに関心を持ち、生物学的な内容を扱ったニュースなどにも目を通しておこう。